獄医 立花登手控え ④

人間の檻

藤沢周平

人間の檻 獄医立花登手控え④

藤沢周平
© Shuhei Fujisawa 1985

昭和60年11月15日第1刷発行
昭和62年12月20日第6刷発行

発行者——加藤勝久
発行所——株式会社 講談社
東京都文京区音羽2-12-21 〒112
電話 東京(03)945-1111(大代表)
Printed in Japan

デザイン——菊地信義
製版——豊国印刷株式会社
印刷——豊国印刷株式会社
製本——加藤製本株式会社

落丁本・乱丁本は、小社書籍製作部宛にお送りください。
送料は小社負担にてお取替えします。 (庫一)

ISBN4-06-183626-9 (O)

講談社文庫

人間の檻

獄医立花登手控え④

藤沢周平

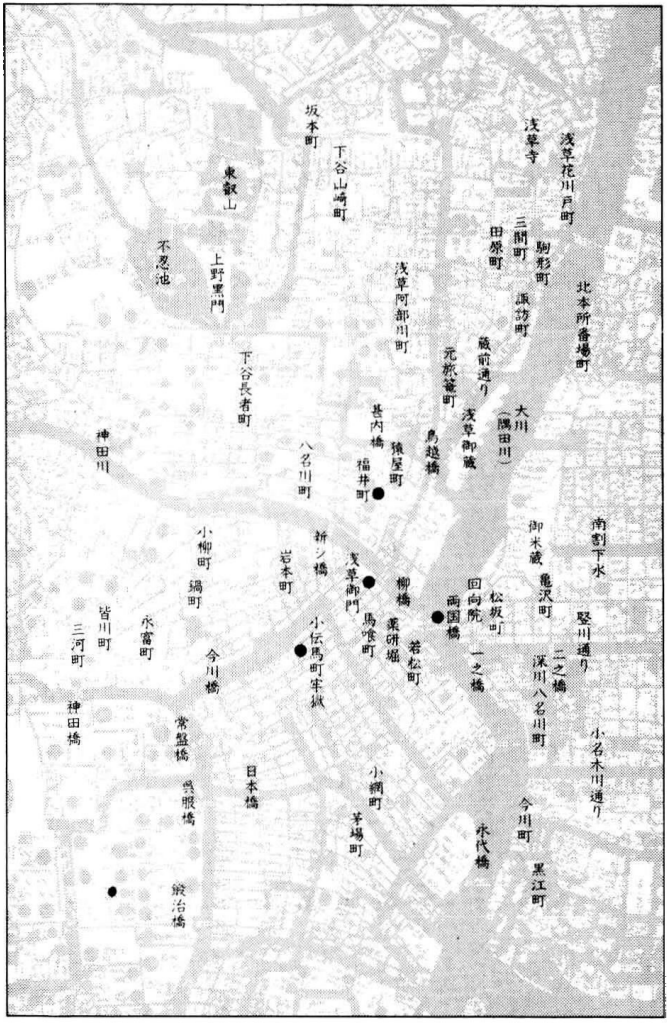
講談社

目次

戻って来た罪　七
見張り　五五
待ち伏せ　一〇五
影の男　一五七
女の部屋　二一三
別れゆく季節　二六五
解説　武蔵野次郎　三一八
年譜　三二三

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbo

小伝馬町牢獄と立花登の住まい福井町付近図



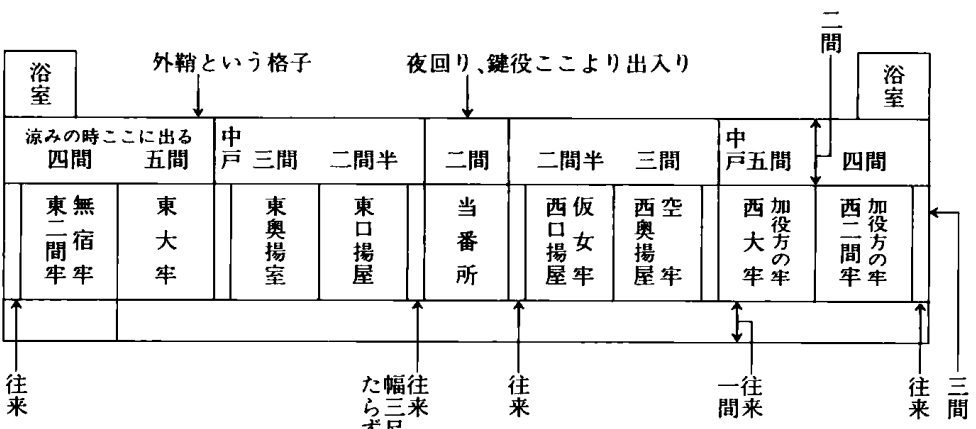
地図作製・安彦勝博

人間の檻

獄医立花登手控え④

小伝馬町牢獄概見図

時代風俗考証事典（河出書房新社）より



戻って来た罪

一

いきなり襖があいて、叔父が入って来たので、立花登はあわてて起き上がった。

「いい、いい、横になっていろ。せっかく骨休めに帰って来てるのだから」

叔父の玄庵は思いやりに溢れる声でそう言ったが、いくら肉親でも寝そべって話すわけにはいかない。それに叔父は用ありげな顔をしていた。登は、喰べ散らした煎餅のかけらを紙にひろいながら坐り直した。

「いや、そろそろ牢にもどる時刻ですから」

「そうか」

と言ったが、叔父はすぐには用件を切り出そうとせず、部屋の中を見回しながら、この部屋もちと狭くなったな、などとつぶやいている。なに、はじめから狭いのだ。

言い出しにくい用でもあるのかと訝りながら、登は助け舟を出した。

「何かご用でしたか？」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbo

「うむ」
叔父は腕組みをして、下をむいた。仔細らしく首までかしげてから、やっと言った。
「頼みがある」
「はい」
「休みのところを使うようで気の毒だが、帰りに彦蔵を診て行ってくれんかな」
「いいですよ」
なんだ、そんなことかと思いながら、登は気軽に引きうけた。
彦蔵は天王町に住む下駄職人である。一年ほど前から、時おり腹を病んで叔父の家に駆けこんで来るようになった。しかし彦蔵の腹病みは、叔父の念入りな手当てにもかかわらずいっこうに快方にむかわず、そのうちに寝こむようになったので、近ごろは叔父が時どき様子を見に行っている。
登も、ひと月ほど前に叔父の代診で彦蔵を見舞ったことがあるので、そういう事情はわかっていた。
「それで、じいさんの様子はどうですか？」
「いかんな」
と言って、叔父はあごを撫でた。
「腫物だ。はっきりと出て来た」
「やはり……」

と登は言った。その疑いは前からあったのだ。彦蔵は死病に取り憑かれたのである。
「すると、助かりませんか？」
「助からん」
叔父ははっきりと言った。
「もって数日というところかな」
「そんなに……」
悪いのかという言葉をのみこんで、登は叔父の顔を見た。叔父も登を見返していた。叔父の表情は淡々としているが、眼にきびしいものが出ている。
――医者の顔だ。
と登は思った。登は叔父のその顔が好きである。叔母の尻に敷かれ、酒毒に冒されて日暮れになると飲まずにいられない叔父だが、こと本業の医のことになると、叔父はいい加減のことはしない男である。登の眼からはやや古風にみえる医術だが、その医術を駆使して、何はともあれ全力を尽す。
それでもおよばず、いま話に出ている彦蔵のように、死を待つしかない病人もいる。叔父はそういう病人の死に、余分の感傷をはさまなかった。淡々と最後まで死を看取って、見送る。叔父がつめたいのではない、と登にはわかっている。
長い間、人間の生死にかかわりあって来た叔父には、おそらく登などよりはるかに明確に、人事のおよばない領域というものが見えているはずだった。医術のおよばない無念さと病人に対す

るあわれみを圧し殺して、叔父はそのあとを天命にゆだねる。
人事と天命の、その一線に関与した者のある種の諦観ときびしさが叔父の顔に出ていた。叔父は医者だと、あらためて登は思った。かすかな感動が胸に動くのを感じながら、登は気持よく請け合った。
「いいですよ。寄って行きますから、ご心配なく」
「そうか、それは助かる」
「薬は？」
「これだ」
叔父は懐から紙に包んだ薬を出した。手回しのいいことである。
「痛みどめだ。これしか手がない病人だからの」
「わかりました」
「わしが出られればいいのだが、ちとほかに用がある」
その用事はよほどいそぐことらしく、では、頼んだぞと言うと、叔父は急にそそくさと腰を上げた。
叔父が出て行ったあと、登は窓をあけて大車輪で部屋を片づけた。狭い部屋だが、散らかしてあるからよけいに狭く見えるのだ。出しっ放しの布団を押入れにほうりこみ、机のまわりに散らばっている書物を積み直すと、部屋の中はいくぶんさっぱりとなった。
着換えて、洗濯した下着と叔母がくれたお茶の袋、煎餅などを風呂敷に包む。叔父から預かっ

た薬を、忘れずに懐にねじこむと、登は部屋を出た。
茶の間をのぞくと、叔母が襷がけで茶簞笥の掃除をしていた。湯呑みや小皿のたぐい、爪楊子や唐辛子入れ、瀬戸物の狸の置物などが叔母のまわりいっぱいに散らばって、足の踏み場もないほどである。
「では、出かけます」
登が言うと、叔母は布巾をにぎっていた手をおろして、おどろいたように登を見た。
「おや、まだ早いじゃないか？」
「はあ、途中で寄るところがありますから」
「ご飯は？」
「いや、むこうでたべますから、ご心配なく」
「そう、ごくろうさま」
叔母は狸の置物をつかんで、きゅっきゅっとみがいた。そして、この次はもう少し早く帰って来なさいよ、と小言を言った。
登は今日、若松町の道場に寄って、新谷弥助を相手にひさしぶりに汗を流した。そのために、叔父の家にもどったのは昼過ぎで、しかも空き腹をかかえていたので飯櫃がカラになるほど、大飯を喰った。帰りがおそかったので叔母のお手伝いもなく、あとは部屋に閉じこもってごろごろしていただけである。叔母の口吻を聞くと、大飯のもとでを取れなかったのを残念がっているようでもある。

今度は早く帰れということは、手伝いの仕事を用意して待っているということである。登は返事をせずに、べつのことを聞いた。

「叔父さんは？」

「出かけましたよ」

叔母は、みがき上げた狸の顔を、しげしげと眺めている。

「どこへ？」

登はおどろいて言った。叔父はたしか、用があって外に出られないようなことを言ったはずである。

「どこへって、往診ですよ」

「……？」

「あなたも知ってる表の彦蔵じいさん。あのひと、ずっとぐあいが悪くてね」

「じゃ、天王町に？」

「そう言って出ましたよ、たったいま」

登はあいた口がふさがらなかった。叔父の腹が読めたのである。彦蔵の家へ行くわけがない。叔父の行く先は、多分飲み友達の吉川恒朴（むかわこうぼく）のところである。

「どうしたの？」

叔母が訝しそうに登を見た。

「いえ、べつに。いや、叔父さんも大変ですな、いろいろと」

「だって、それが叔父さんの仕事だもの。もっとも病人が彦蔵じいさんじゃ、お金にもならないようだけど」

叔母は疑う様子もなくそう言い、今度は力をいれて茶簞笥をみがきはじめた。登は、何となく足音をぬすむような気分で、茶の間をはなれた。

うしろからいまにも、叔父さんのほんとの行く先を知ってるならお言い、と叔母の声が追いかけて来そうで、首筋のあたりがこそばゆかったが、そんなこともなく登は首尾よく玄関を出た。

二

時刻はまだ七ツ半（午後五時）前だと思われた。空はあらかた雲に覆われていたが、その雲はところどころで切れて、雲間から西に傾いた日が、ここではなく遠い西の町のあたりに太い光の束を投げおろしているのが見えた。木々の葉はあらかた落ちつくし、歩いて行く道のあちこちに、この間の木枯しが吹きよせた落葉がたまっている。風景は寒々としているが、風がないのでさほど寒さは感じなかった。

――叔父もしようがないな。

と登は思った。おそらくは叔母の監視がきびしくて、近ごろは何かの口実をつくらないと飲みに出にくくなっているのだろう、と見当はつく。しかし、それにしても病人、しかも瀕死の床にいる病人をダシにつかうとは、叔父も堕落したものだと思った。酒飲みもそこまで行くと、あさましい。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbo